

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

グローバル化する社会と向き合う大学生を育てる

著者	小松 俊明
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	13
ページ	1-4
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001357/

[随想]

グローバル化する社会と向き合う大学生を育てる

東京海洋大学 教授 小松 俊明

The Talent Development towards Globalization

Toshiaki KOMATSU

1. はじめに

海洋・海事・水産分野で活躍するグローバル人材を育てること、これが今、東京海洋大学のグローバル教育に課されたミッションである。2012年、東京海洋大学はグローバル人材育成推進事業に採択された。社会のグローバル化に対応した教育改革の断行に、本学が大きく舵を切ることになった元年である。時を同じくして、私は縁があって本学に着任した。産業界出身の教員であり、過去にグローバル企業で働き、長い海外生活を体験し、グローバル化する社会と向き合うビジネスマンとしてグローバルキャリアを積んできた。

グローバル人材育成推進事業では3大教育改革を掲げ、その一つが海外派遣キャリア演習の創設である。プログラムの開発から運営までを私が担当することになり、2013年夏、海外探検隊プログラム（以下、海外探検隊と表記）が生まれた。その後4年間にわたって、海外探検隊は海洋科学部で実行してきた（2017年3月派遣が8期生となる）。そして4年目を迎えた2016年8月、ついに海洋工学部の学生が参加したことで全学展開を達成した。以上を踏まえ、あらためて海外探検隊のこれまでを振り返りたい。

2. アジア5か国と北欧1か国に年間50名を派遣するスキームが完成

海外探検隊を開発するにあたって考えたことは、東京海洋大学の教育研究の特徴を生かした個性的なプログラムにすること、これを機会に世界各国で新たに強力なパートナー（産業界、アカデミア、行政機関等）を得ること、そして将来的に持続可能なプログラムにすることだった。その結果、まずはシンガポール、タイの2か国で同プログラムを立ち上げた。その後、香港と台湾、最後にマレーシアプログラムを立ち上げるまでを第1期計画（2012-2016）とした。ベトナムやインドネシアを含め、ほかにも開拓したい国は複数あったが、それらは第2期計画以降で検討することに決めた（2017以降）。

飛躍的に若者を育てる高品質の教育プログラムを作るには、学外からも強力なパートナー探しをすることが必須である。これは、グローバル企業の人材採用や人材育成施策に取り組んできた私にとって、同プログラム開発プロジェクトを成功させるための最大のポイントになることはわかっていた。つまり、自前でできることをやるだけではなく、最初から強力なパートナーを得て、互いに強みと弱みを補完しあうことで、よりレベルの高いプログラムを目指すということである。この実現のためには、大学にあるすべてのしがらみをいったん断ち切り、ゼロベースでパートナー探しを検討することが必要だった。既存のパートナーにこだわらず、最初に考えた「海外探検隊50年構想」（後述する）に基づき、その実現に向けて最適なパートナーを戦略的に決めることを決意したのである。

まず海外大学のパートナーは、成長するアジア各国のトップ大学をターゲットにすることにした。世界大学ランキングで上位に入り、一般には東京海洋大学より格上とみなされている規模の大きい総合大学に照準を合わせた。日本でいえば東京大学や京都大学相当の大学であり、実際にリストアップしたのは、シンガポール国立大学、香港大学、台湾大学である。これらアジアのトップ3校との大学間協定は当時本学には存在しておらず、まずは協定締結へ挑戦することから始める必要があった。それが早期に成功したのは、もう一つの大切なパートナー探し、いわゆる「グローバル企業との協力体制」を同時並行で構築できたことが要因である。

例えば、アジアに進出する日本を代表するグローバル企業（例：ヤクルト、味の素、ヤンマー）との提携に挑戦したのは、これらの会社が東京海洋大学で学ぶ食品、流通、電子機械の分野にゆかりの深い事業を展開する優良企業であったからである。これらの企業の協力を勝ちとるために最初に考えたことは、本学がアジア各国のトップ大学との協力体制を構築することにあった。

これは裏返せば、世界大学ランキングで上位にランクインするような世界から引く手あまたのトップ校に本学との新しい共同プログラム創設に関心を示してもらうためには、海外探検隊が日本を代表するグローバル企業とのパートナーシップを実現していることが必要であったということだ。つまり、東京海洋大学の海外探検隊は、アジアのトップ学生に対して、日本を代表するグローバル企業における研修機会を提供したのである。この結果、グローバル企業・海外のトップ大学・本学の3者にとって相互利益の大きい魅力ある新しいプロジェクトとなり、話がまとまったのである。

3. 回数を重ねて進化する海外探検隊プログラムの今

マレーシアには、マレー半島のある西マレーシアのほかに東マレーシアの秘境、ボルネオ島があり、ここには南米のアマゾンにも匹敵する生物多様性を誇るボルネオの森がある。そのような土地で海外探検隊プログラムを行いたかった。今日、海外探検隊のマレーシアプログラムはマレーシア国立サバ大学熱帯生物多様性保全研究所とヤンマー研究開発センターをパートナーとし、学生からも人気のあるプログラムに育っている。実際、同プログラムの目玉であるヤンマーの実務研修は、近い将来、海洋工学部の学生が参加することを見越して開拓した研修先である。2016年8月、ついに海外探検隊7期生に海洋工学部から5名の学生が参加した。グローバル教育で、両学部が融合する悲願を達成できた瞬間である。

さて、派遣国に関してもう一つだけ、ここに加筆しておきたいことがある。それは海外探検隊プログラムも回数を重ねて、学部1年生から参加することを希望する学生が増え、その結果、引き続き2度目、3度目の参加を希望する学生が出てきたことだ。このことから、派遣国と派遣人数の拡大に合わせ、より高度な内容を含む上級プログラムを開発する必要があると感じた。その結果、完成したのがリサーチプログラムとバリューチェーンプログラムである。前者は海外大学大学院における研究活動を中心としたプログラム（現状はタイと台湾で実施）であり、学部低年次の学生にとっては研究活動の先取り体験となり、研究志向の強い学生に人気である。後者は、グローバルにビジネスを展開する食品加工会社（タイ）やサーモン養殖会社（ノルウェー）における実務研修である。この実務研修プログラムでは、日本の水産事業を牽引する三菱商事水産事業グループの東洋冷蔵に協力頂いている。このように東京海洋大学には現在、アジア5か国と北欧1か国に向けて毎年50名の学生を海外派遣するプログラムが完成しており、2017年3月も両学部の混合チームで構成される8期生を送り出すことを予定している。

4. 終わりに～海外探検隊50年構想について

最後に、「海外探検隊50年構想」について、プログラムの開発責任者として、そのビジョンを共有しておきたいと思う。海外探検隊50年構想とは、一言でいえば「人脈構築と生涯学習モデルの構築」に尽きる。海外探検隊は、春季や夏季休業の1か月程度、海外で行う実習に参加することで2単位を得る授業科目であるが、このプログラムが意図するところは、はるかにスケールが大きい。

第一に、このプログラムに参加することで、学生に主体的な学びや探求学習の習慣が定着し、プレゼンテーション能力や情報発信力が鍛えられる。英語や多言語学習へのモチベーションも格段に上がる。海外大学で研究室研修に参加し、さらにグローバル企業の実務研修を受けることは、学生本人の近い未来と遠い未来への道筋を示すことにもなる。派遣国に同世代の優秀な仲間をたくさん得ることにもなり、競争相手の存在も意識するようになる。

これらの事実気づいたやる気のある学生は、プログラムに複数回参加するようになる。帰国後に中長期留学に挑戦する学生も、たくさん輩出している。自分が派遣された国の仲間とは一生付き合える友情を育むが、ほかの派遣国の学生や異なる時期に派遣された先輩や後輩とも交流する機会を同プログラムは多数用意している。

つまり、意識の高い学生が海外探検隊に多く集まり、プログラム終了後も、お互いにネットワークを広げ、さらなる挑戦を続けて切磋琢磨しているのだ。実際、すべての海外探検隊参加者は、海越会（うみごえかい）という同窓会メンバーとなる。同窓会メンバーが70名を超え、大学を卒業するOB/OGが出始めた2015年から第1回の海越会を始めた。この同窓会は年一度開催しているが、毎回多くの在校生に加えて、社会人になった卒業生も参加してくれている（現在の会員数は、8期生までで合計141名）。このように、海外探検隊は在校生だけのものではなく、卒業してからも末永く、ずっと海外探検隊ネットワークとの交流を保ち、互いに学びあう「生涯学習の場」として育ち続けるのである。本学としても様々なグローバル企業や行政機関等に就職した卒業生達とのつながりを維持することになる。彼らは、未来の後輩のために海外探検隊の運営に対しても様々な協力をしてくれることだろう。自分が学生時代に海外探検隊で出会った社会人の先輩方から受けた恩は、いずれ自分が社会に出てから、後輩のために返してくれると私は信じている。同窓会である海越会には、いずれはいろいろな世代の先輩・後輩が集うようになるだろうが、その時は皆で力を合わせてグローバル社会の抱える難しい課題の解決にも挑

戦して、社会に貢献してくれる日が来ることだろう。これが「海外探検隊50年構想」である。これからも末永く年2回の派遣を続け、いずれ50年で100期生を送り出す日が来ることを夢見たいと思う。



東洋冷蔵本社にて、タイの食品加工工場研修の成果報告をする海外探検隊の学生達



マレーシア・コタキナバルのサバ州政府機関にて、成果報告をする海外探検隊の学生達



松戸高等学校で、高校生と交流する海外探検隊の学生及びアジア 5 大学10名の学生達



ノルウェー・フィヨルド沖にあるサーモン養殖場で、養殖研修を受ける海外探検隊の学生達